
AFTER THE FRONTIER

炬燵イチゴウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AFTER THE FRONTIER

【Nコード】

N2959G

【作者名】

炬燵イチゴウ

【あらすじ】

バジユラとの戦いを終えたフロンティア船団。新天地に降り立ち、開拓をはじめた者達のその後…

01：帰還（前書き）

ほぼ初めてといえる小説です。そのため文章が拙く読みづらいかも
しれません。

ストーリーがとんだりするので、連載というよりも短篇の連作とな
りそうです。

01：帰還

「くっ、限界か。」

針の振り切れた諸計器が、鳴り止まないアラームが脱出を促している。

限界、とはいうがよくぞここまで飛べたものと熟々思う。

何せ大気圏突入の際など生命維持を除いた機体のエネルギーをピンポイントバリアに全て回してなんとか、といった具合だったのだ。機体はもちろん、EXギアの通信機器もあの最後の特功じみた強襲のときの無理な加速Gのせいか駄目になっている。

これでは誘導は疎か救難も期待できない

スカル4として数々の任務を、そしてグレイス・オコナー率いるバジューラとの最終決戦をも共に戦いぬいた機体だ。正直、軍のVF-171EXナイトメアプラスなどとは比べるほどにない愛着がある。出来得るならせめてクォーターまで飛んでオーバーホールなりレストアなりをさせてやりたかった。

だが、そうもいかないようだ。先程から操縦桿の自由がきかず、揚力も低下してきている。このままでは確実に墜ちる。

何事も命あってこそというのが、軍属になって初めて学んだことであり、数多く学んだ中でも一番大切なことだ。惜しくはあるが、愛

機のVF-25Fメサイアを棄て脱出をはかる。

(執着しすぎてリリエントールの様には成りたくはないからな。)

脱出と同時に煙をあげ炎上しはじめた機体に感謝と哀悼の意を込め宙で敬礼し、折り畳まれていたEXギアの翼を広げ念願であった本物の空を飛翔する。

しばらく空を味わうように飛んでいると特徴的なストロベリーブランドの人影が見える。

ランカやキャシー達の姿も見えた気もするが、シエリルしか眼に入らなかった。

「ッ、シエリル！」

ありったけの声で彼女の名を叫ぶ。すると近づいてくることに気付いたのか何故か走り逃げ出すシエリル。

「なんだっていうんだ、アイツは。帰ってきたら話を聞いてくれるんじゃないかったのかよ!？」

シエリルの訳の分からぬ行動に苛立ちながらも妙な焦燥感に駆られ、大地に降り立ち跡を追うアルト。

病で体力の落ちたシエリルと軍で鍛えたうえにEXギアの膂力を得たアルト。結果は端から見えていたのだ。

「なんで逃げるんだよ、シエリル!話、帰ったら聞くんじゃないかったのかよ。」

逃さんとばかりに、けれど痛めないよう注意を払いながら彼女の腕を掴む。

「逢いにいくべきはあたしじゃなくてランカちゃんでしょう?」

それこそ訳が分からないと反論するアルトに信じられないといったふうにしエリルは声を荒げる。

「もう恋人ごっこは終わりって言ったでしょう。同情なんかで優しくしないでよ!それってね、時にひどく人を傷つけるのよ。…もういいから、ランカちゃんのところに行ってきなさいよ。」

あの子が好きなんでしょ?と続けられた言葉には哀しみが溢れていて、それに気付けぬアルトではない。それが本気で言っているのだと理解する。

「ッ、シエリル。おまえ、そんな風に思ってたのかよ。」

「違っつていうの!?!」

「ああ、違うさ。おまえは俺が好きでもない女のために離縁した家に戻ると、好きでもない女を抱くと本気で思ってるのか!」

「だって、アルトは生粋の役者でしょう。」

それぐらい…と続ける言葉に、先ほど感じた焦燥感、やはりというべきか当たっていたのだと感じられた。

「そうかもしれない。だけど俺は死に逝く女を抱くほど物好きでもなけりゃ、そんな女の命を背負えるほど人間出来ちゃいない。」

「俺は心底惚れてるんだ。他の誰でもないシェリル、おまえにだ。」

「…本当なの？今までが嘘じゃなかったって、これからもアルトと一緒にいてもいいって、信じてもいいの？」

いつものシェリルとは比べものにならないほど弱々しく、愛に飢えた子猫のように目を潤わせ、手を胸に添えてこちらを見上げてくる。

「ああ、この気持ちは嘘でも演技なんかでもない。」

愛してるんだ、の言葉とともに口をついばむような甘く軽いキスが降り注ぐ。

それに安堵したのかシェリルの心にゆとりが出来、辺りを見渡すが自分達二人を除いて誰もいない。

その自然を見て、まるでエデンの園のアダムとイヴのようだと場違いにもインスピレーションを感じていると、同じくキョロキョロと辺りを見渡していたアルトの声が上から聞こえてくる。

「ずいぶんと遠くまで来ちまったなあ。一番近くに見えるクオーターまででも結構な距離があるな。」

一緒に外に出てきたはずのランカ達の姿も見当たらないから、知らずのうちにかなり遠くまで走ってきたようだ。

「ねえ、いいこと思いついたわ。あたしを抱えてとぶのよ。」

名案だ、といわんばかりに満面の笑みでいつもの女王様よろしく命

令をしてくる。

これが彼女の不器用なお願いであり甘えなのだと、アルトにはわかってる。それに今まで彼女の“命令”を断れたためしがない。

「しょうがない。空からなら誰か見つけれられるかもしれないし、飛んだほうが早いものな。それに、歩いてたんじゃ日が暮れちゃう。」

アルトは素直に成りきれないものの返事をかえずとシエリルの背と膝うらに手を伸ばして　つまりは俗に言うお姫さま抱っこの体勢となり　翼をひろげ果てのない空へと飛翔した。

01：帰還（後書き）

劇場版の放映が決まっていますが、それに関係なく話を進ませてくださいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2959g/>

AFTER THE FRONTIER

2010年10月17日04時32分発行